

Title	前工業化期日本農村における小農家族経済と市場経済： 経済学と人類学的思考の接点から
Author(s)	友部, 謙一
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46717
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	とも 友 べ 部 けん 謙 いち
博士の専攻分野の名称	博 士 (経済学)
学位記番号	第 19887 号
学位授与年月日	平成 18 年 1 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	前工業化期日本農村における小農家族経済と市場経済：経済学と人類学的思考の接点から
論文審査委員	(主査) 教授 阿部 武司 (副査) 教授 佐村 明知 教授 澤井 実

論文内容の要旨

本論文は、前工業化期日本農村における市場および市場経済の変化を、個々の農民や、家族ないし世帯のそれへの対応に関する分析を通じて解明し、市場と人間との関連、人間が市場とのバーゲニングで優位に立つべく蓄積してきた工夫の軌跡を描き出したものである。著者は、社会経済史研究における市場および市場経済の主役が、市場の自律性や自律的成長そのものではなく、そのプロセスに携わった人間同士の関係、人間の創出した制度や組織の発生とその変化の過程、市場・制度・組織が相互に関連しつつ創出された市場社会全体とみる。

本論文の第 1 の課題は「徳川時代初頭の「農家」の独立と市場/市場経済の発達」であり、近世日本における小農家族経済の歴史的形成の過程分析（第 1 章）とチャヤノフの着想による経済学的モデルの批判的検討がなされる（第 2 章）。

第 2 の課題は「前工業化期日本農村における市場経済の発展と家族経済：農村の市場経済化」であり、第 3 - 4 章で徳川中期（18 世紀）以降の日本農村での市場経済化と家族経済の関係が、プロト工業化論を視野に入れつつ論じられる。恒常化する市場経済の中で、農民や農家は一律に純粋な price taker ではなく、市場化する財や市場のタイプにより、農家と市場経済の関わり方は違っていた。ここでは農家の家族構成上の特徴がいかに市場経済に適応してきたのが考察され、農家の経済行動に関する Z 財生産領域の誕生、および労働供給に関する後方屈曲カーブからの解放が重視される。

第 3 の課題は「前工業化期日本農村における家族経済と地主小作関係：土地貸借市場を参照体系として」である（第 3 - 6 章）。徳川中期以降の日本農村の市場経済化を語る際、生産財たる土地の市場化に関わる地主小作関係の進展を検討する必要がある。ここでは小規模経営農家の世帯ライフサイクルと土地市場の関係に焦点をあてて、チャヤノフ法則が小農家族経済における経営耕作規模と世帯ライフサイクルの関係の中に確認される。

第 4 の課題は「幕末農民の新たな「市場」意識の形成：百姓一揆の数量分析」である（第 7 - 8 章）。幕末から明治維新へ至る日本社会の大変動は、政治的・短期的・全国的に形成されたものではなく、開港を機に新展開を遂げた市場経済に十分対応できない伝統的な市場インフラを改善しようとする共同規範意識が、当時の農民/農家を百姓一揆に向かわせたのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、経済学および人類学的見地から、前工業化期日本農村における市場および市場経済の変化に、農民や農家がいかに対応してきたのかを理論的・実証的に考察している。著者は英文資料や一次史料を含む夥しい文献を駆使してこの課題に挑戦し、多数の新しい重要な知見を示した。近代史への展望をより鮮明に出すことが望まれるが、それは本論文の価値を損なうものではない。本論文は博士（経済学）の学位に十分値するものと判断する。